

元代の漢字音訳法
—蒙古語の音節末閉鎖音について—

吉池孝一

1. はじめに

所謂中期蒙古語の音節末閉鎖音は、元代のパスパ文字では-q、-g、-d、-bで、明初の漢字音訳を反映すると見なされている『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』では黒/x-/、克/kh-/、惕/th-/、ト/p-/・必/p-/で表記される。これらは伝統的な蒙古文語の-γ、-g、-d、-bに相当する。これによると、パスパ文字の-g、-dから想定される蒙古語の音韻と、『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』における音訳漢字の克/kh-/、惕/th-/との間には齟齬があるように見える。それというのも、『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』では、蒙古語の有声閉鎖音および破擦音を漢語の無声無気音の声母(音節初頭子音)で、蒙古語の無声閉鎖音および破擦音を漢語の無声有気音の声母で表記するのが普通のあり方である(用語等については本節末尾を参照願いたい)。この点は服部 1946 で指摘されれば共有の知識となっている¹。しかるに、閉鎖音が音節末に位置する場合は趣を異にする。パスパ文字の-g、-dから想定される蒙古語の音韻は有声閉鎖音の/-d/、/-g/であるが、『華夷譯語(甲種本)』では惕/th-/と克/kh-/で音訳される。パスパ文字の表記に拠る限り音韻的に有声音であることが想定される/d/や/g/が、明初では何故漢語の無声有気音の惕/th-/や克/kh-/で音訳されるのかという問題の解明はなかなかやっかいである。/-d/や/-g/の音声(音韻ではない)はどのようなであったか、主要な音訳者の第一言語は漢語であったのかそれとも蒙古語であったのか、誰のために為された音訳であるのか、そもそも蒙古語の質が異なるのではないかなど様々な要因が絡み合っているであろう。また音節末の音訳漢字は専用のもので使用されるわけであるが、それは『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』の時点でなされたのか、それとも伝統を踏まえているのかなど問題もある。いろいろ問題はあるが、まずは、『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』にみられる音訳法がどこまで遡るのかということ調査し、そこからいろいろ考えるしかないであろう。

そこで、これらの音節末の閉鎖音が元代においてどのように漢字音訳されているかを調べてみることにした。もともと、元代の漢字音訳蒙古語資料には様々なものがあり調べると言っても容易ではない。漢字音訳された語形のどの部分が音節末子音であるかということについては、『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』や伝統的な文語形との比較によって、およその見当をつけることはできるのであるが、問題としている資料において音節末子音と想定したものが本当に音節末子音なのかどうか、母音が付加されていたのではないかなど、その是非を実証する段になると作業がそれほど容易なことではないと思えてくる。そこで、手間をかけずに音節末子音と見なし得るものを探すとすると、それも確実とはいか

¹ 服部 1946 の 79 頁参照。

ないが、表音文字である蒙古文字(ソグド系文字)およびパスパ文字と漢字音訳が対訳の関係にある資料ということになる。そのようなものには①漢訳と合璧となった聖旨碑文や②宣勅を版本に仕立てたものや③官印(漢語の背記を有するもの)などがある。しかしながら、資料の量は少ない。量の多い資料となると、やはり音訳漢字だけの『至元譯語』(『蒙古譯語』とも称す)のようなものとなる。不安ながら次善の資料としてこれも取り上げる。もっとも、元代の漢字音訳蒙古語の資料というならば『元史』(明初に成書)中の音訳漢字を含め他にも様々なものがあるではないかとお叱りを受けそうである。本来であるならば網羅的な検討が必要であるが、音節末閉鎖音の音訳法に限ってみるならば、上に挙げた資料でも『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』との違いの概略くらいは知ることができると考えている。もっとも、その概略が、音訳法の違いを反映したものなのか或いは音訳の対象となった蒙古語の質の違いを反映したものなのか確かに述べることはできないのであるが、元代の音訳法を考える準備作業程度のものでご寛願願えれば幸いである。なお、これよりパスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字し提示する²。

作業を始める前に一言しなければならぬ。上において、蒙古語の二項対立子音を何の断りもなしに“有声音”“無声音”などと称したが、これらの子音を軟音と硬音という用語によって示し論を進める立場もあり得る。しかしながら、漢語音との比較の便宜のため有声音、無声無気音、無声有気音という用語を用いたほうがよいと判断したということをご理解願いたい。また、有気音という用語は帯気音と同義として用いた。これは漢語における用語を利用したままで両者に差異を設けているわけではない。なお、音韻を/ /で括ったわけであるが、この場合の音韻は“音韻観念”を意図している。やや唐突な物言いであるが、有坂秀世氏が提唱したこの“音韻観念”の思想は、音韻史を論ずるさいに極めて有用であると考えている³。

2. 対訳碑文

蒙古語と漢語が対訳となった元代碑文により音訳漢字を見ると次のようである。資料は中村 淳・松川 節 1993 および照那斯圖 1991 および呼格吉勒圖・薩如拉 2004 により蒙古字

² <子音> 𐪄 g 𐪅 k' 𐪆 k 𐪇 𐪈 d 𐪉 t' 𐪊 t 𐪋 n 𐪌 l 𐪍 b 𐪎 p' 𐪏 p 𐪐 m 𐪑 f (𐪒 f1 奉母 𐪓 f2 非敷母。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様) 𐪔 v 𐪕 j 𐪖 č' 𐪗 č 𐪘 ŋ 𐪙 š (𐪚 š1 禪母 𐪛 š2 審母) 𐪜 ž 𐪝 j 𐪞 c' 𐪟 c 𐪠 s 𐪡 z 𐪢 ḥ (𐪣 ḥ1 匣母 𐪤 ḥ2 曉母) 𐪦 γ, 𐪧 y (𐪨 y1 喻母 𐪩 y2 幺(影)母) 𐪪 r 𐪫 q <半母音> 𐪬 ü 𐪭 i <母音> 𐪮 u 𐪯 i 𐪰 é 𐪱 e 𐪲 o とし、母音 a は()を付して補写する。

³ 有坂氏の音韻に係わる思想は著書『音韻論』(初版昭和 15 年, 第三版昭和 18 年)に結実している。私の理解によれば、“丁寧な発音”の聴覚印象と調音運動を通して脳中に形成された音の観念を“音韻”と称する。私個人としては、音韻観念の思想は音韻の沿革すなわち音韻史を論ずる際に極めて有用であると以前より考えている。有坂氏は音韻史構築のために音韻観念の思想を導入したのではないかとさえ思えてくる。さらに思うに、脳中にある音韻の存在は、丁寧な発音の観察、内省、音声の補い合う分布、そして過去の音韻であってみれば文字による表記法や沿革の記録に見える沿革の様子などを総合して「仮定」されるべきものなのであろう。なお、最近『有坂秀世研究 一人と学問一』(慶谷壽信著)が発刊された。この書は有坂秀世氏の思想を研究するうえで極めて重要な書といえよう。

の翻字と転写を提示する。

■蒙古字蒙古語。

少林寺聖旨碑第1截・少林長老福裕宛モンケ皇帝ウシ年(1253)聖旨

TWRWXT'Y (Turu γ tai) 禿魯黒台(人名)

少林寺聖旨碑第2截・少林長老福裕等宛クビライ皇帝トリ年(1261)聖旨

博士 P'XSY (ba γ si) 八合赤

少林寺聖旨碑第3截・足庵浄肅宛クビライ皇帝タツ年(1268)聖旨

博士 P'XSY (ba γ si) 八合失

語中において、蒙古文字-γ(パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語甲種本“黒/x-/”)に音訳漢字の“黒”“合”が対応する。

■パスパ字蒙古語

・少林寺聖旨碑第4截・ ᠠᠮᠤᠯᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤ 鼠年(1312)聖旨、普顔篤皇帝虎年(1314)聖旨(1)(2)(3)(4)、普顔篤皇帝馬年(1318)聖旨、妥懽帖睦魯皇帝猪年(1335)聖旨、妥懽帖睦魯皇帝兔年(1351)聖旨の各碑文において、皇帝名 k'eu-lug, k'eu-leug に音訳漢字“曲律”が対応する⁴。

・妥懽帖睦魯皇帝猪年(1335)聖旨、妥懽帖睦魯皇帝鼠年(1336)聖旨、妥懽帖睦魯皇帝兔年(1351)聖旨の各碑文において、皇帝名 qu-t'uq-t'u に音訳漢字“護都篤(1335)”“忽都圖(1336)”“忽都篤(1351)”が対応する。

k'eu-lug(leug)をみると、語末の lug(leug)は“律”で音訳されており、パスパ文字-g(元朝秘史・華夷訳語甲種本“克/kh-/”、文語-g)に対応する独立した音訳漢字はない。

qu-t'uq-t'uをみると、語中の t'uq は“都”で音訳されており、パスパ文字-q(元朝秘史・華夷訳語甲種本“黒/x-/”、文語-γ)に対応する独立した音訳漢字はない。なお、無声有気音のパスパ文字 t' に、無声無気音声母の“都、篤”が対応するのはなぜかという問題もあるが論旨に係わないのでここでは言及しない。

3. 対訳宣勅(版本)

元の呉澄に授けられたパスパ字漢語の宣勅資料11通が収められた明・永樂四年(1406)刊行『臨川呉文正公草廬先生集』がある。これらの資料は神田1969による。

■大徳四年(1300)の勅に 'eo-g(a)-pu-q(a) 月古不花(人名)とある。'eo-g(a)は、'eog-とあったものを、明代の翻刻時において音訳漢字“月古”に合わせて二分したものであろう。

■至大元年(1308)の勅に bo-lod- t'e-mu-r(a) 波羅帖木児(人名)、bo-lod-t'(a)-s(a) 波羅達識(人名)とある。mu-r(a)および t'(a)-s(a)は、mur-および t'(a)s とあったものを、明代の翻刻時において音訳漢字“木児”および“達識”に合わせて二分したものであろう。

'eog- pu-q(a)をみると、語中のパスパ文字-g(元朝秘史・華夷訳語甲種本“克/kh-/”、文語-g)に無声無気音の“古/k-/”が対応する。bo-lod- t'e-mur および bo-lod-t'(a)s をみると、語中のパスパ文字 d(元朝秘史・華夷訳語甲種本“惕/th-/”、文語-d)に対応する独

⁴ 普顔篤皇帝虎年(1314)聖旨(1)および妥懽帖睦魯皇帝猪年(1335)聖旨は k'eu-leug。

立した音訳漢字はない。

4. 対訳官印

元代の官印には、印面にパスパ字漢語もしくはパスパ字蒙古語、背の部分に漢語で造印の年月と印面の内容を刻したものがあつた。これより紹介するものは印面のパスパ字蒙古語と背記の音訳漢字が対応したものである。

■背記は“万州諸軍奥魯印／中書礼部／延祐四年八月 日造”（1317年）。華光普 1998(429頁)による。

印面：’(a)-・u-ruq 背記：奥魯 — 『元朝秘史』老小營(陣營の意)“阿兀[舌]魯(黒)”

■背記は“鎮寧州諸軍奥魯印／中書礼部／至正十五年七月 日造”（1355年）。黄惇 1999(49頁)による。

印面：’(a)-・u-ruq 背記：奥魯 — 『元朝秘史』老小營(陣營の意)“阿兀[舌]魯(黒)”

語末のパスパ文字-q(元朝秘史・華夷訳語甲種本“黒/x-”、文語-γ)に対応する独立した音訳漢字はない。なお『元朝秘史』との対応は照那斯圖 1977(78頁)で既に指摘されている。

5. 『至元譯語』(『蒙古譯語』とも称す)

この書の最も古い版本は元の泰定乙丑年(1325)に基づいた元禄12年(1699)の日本刊本であるから、少なくとも泰定乙丑年(1325)以前のものである。かりに書名の“至元”が年号であるとしたならばフビライの至元年間(1264-1294)のものということになるが、それは分らない。この書と『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』との比較対照は、既に長田 1953にあるので、それを利用し、やや補充と訂正を加えて提示する。なお、()によって小字で書かれた音節末子音を、[]によって音節初頭子音の音質を指示した小字の漢字を示すことにする。右端の文語形は Lessing 1960 による。所謂乙種本『華夷譯語』⁵に付された蒙古字の音形が文語と異なる場合は(乙種本)として音形を記す。なお乙種本は複数あり、音形が異なるものは複数提示する。

文語-γ

19. 泉“布刺” — 『華夷譯語(甲種本)』“布刺(黒)” — 文語 bula γ

139. 甲“忽耶” — 『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』“[中]忽牙(黒)” — 文語 quya γ

144. 旗“秃” — 『元朝秘史』“秃(黒)” — 文語 tu γ

195. 黒豆“匣刺不奴叉” — 『華夷譯語(甲種本)』“ト兒察(黒)” — 文語 burča γ

402. 蒜“撒林撒” — 『華夷譯語(甲種本)』“撒[舌]林撒(黒)” — 文語 sarimsa γ

474. 一宿“你干豁納” — 『元朝秘史』“[中]豁那(黒)” — 文語 qonu γ

○98. 騙馬“阿急荅” — 『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』“阿(黒)塔” — 文語 a γ ta

語末の-γ(パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語甲種本“黒/x-”)に対応する独立した音

⁵ 『北京圖書館古籍珍本叢刊6』(北京：書目文出版社)による。

訳漢字はない。98 番をみると、語中の-γに無声無気音の“急”が対応するのであるが、長田 1953 はこれを“忽”とする。“急”には/k-/が、“忽”には喉の摩擦音/x-/が想定される。先の少林寺聖旨碑において、蒙古文字-γ(パスパ文字-q、元朝秘史・華夷訳語甲種本“黒/x-/”)に喉の摩擦音声母を持つ“黒”“合”が対応した例をみたわけであるが、長田 1953 の見立てのように“忽”が正しいとしたならば、少林寺聖旨碑の例と平行した関係となる。おそらく、ごく早い時期に字形の類似により“忽”が誤って“急”とされ諸版本に引き継がれたのであろう。

文語-g

210. 馬妳子“兀宿” — 『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』“額速(克)” — 文語 esüg

297. 文書“必赤” — 『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』“必赤(克)” — 文語 bičig

300. 筆“俗肅” — 『華夷譯語(甲種本)』“兀租(克)” — 文語 üjüg, üsüg

378. 花“掣掣” — 『華夷譯語(甲種本)』“扯扯(克)” — 文語 čečeg

語末の-g(パスパ文字-g、元朝秘史・華夷訳語甲種本“克/kh-/”)に対応する独立した音訳漢字はない。

文語-d

307. 珠子“速不” — 『華夷譯語(甲種本)』『元朝秘史』“速不(惕)” — 文語 subud

319. 鵬“不魯昆” — 『華夷譯語(甲種本)』黒鷹“不魯骨(惕)” — 文語 bürgüd, (乙種本)b ürugüd

○204. 焼餅“兀都麻” — 『華夷譯語(甲種本)』“兀(惕)箴(克)” — (乙種本)兀惕箴克üdme, 兀麻üdmeg

語末の-d(パスパ文字-d、元朝秘史・華夷訳語甲種本“惕/th-/”)に対応する独立した音訳漢字はない。語中の-dに無声無気音の“都/t-/”が対応する。

文語-b

48. 絃匠*“勘直” — 関連語彙として: 『華夷譯語(甲種本)』弓弦(弓のつる)“闊(ト)赤” — 文語 köbči(弓のつる) *弓のつるを作る職人であろう

○189. 弓絃“欽不喫” — 『華夷譯語(甲種本)』“闊(ト)赤” — 文語 köbči

397. 葉兒“南赤” — 『華夷譯語(甲種本)』“納(ト)陳” — 文語 nabči

456. 十月“怯斂都兒” — (乙種本)“客勒ト秃兒撒刺 kel(e)btür sara”

495. 将来“黯赤列” — 『元朝秘史』将来着“阿(ト)赤[舌]刺周” — 文語 abčiraqu

語末の例はない。○を付した 189 番以外は、語中の-b(パスパ文字-b、元朝秘史・華夷訳語甲種本“ト/p-/、必/p-/”)に対応する独立した音訳漢字はない。しかしながら、“勘/-m/、南/-m/、斂/-m/、黯/-m/”は全て/-m/韻尾を持つことから、この韻尾によって、調音位置が同じ-bの表記を意図したとみることができる。189 番の“欽”もやはり/-m/韻尾をもつ。

この例はさらに無声無気音の“不/p-”を添加して蒙古語の音節末子音-bを表記する。おそらく、最初は“欽喫”であり、何らかの理由によりその後“不”が加えられて“欽不喫”となり、二重の表記に見えているのであろう。

なお長田 1953 は『至元譯語』の蒙古語の音韻特徴を挙げるわけであるが、その中で語末の閉鎖音の一部につき“-γ, -g の脱落（あるいは表記しないこと）”と指摘する。蒙古語自体の音韻特徴であるかもしれないし、そうではなくて表記上の問題にすぎないかもしれないという慎重な態度は、元代蒙古語の漢字音訳法を調査する上で常に心しなければならないところであろう。

6. おわりに

以上、文語の-γ、-g、-d、-bの四種に対応する音訳漢字の例を見てきた。それによると、語末ではこれらの閉鎖音は表記されず、語中においては表記されることもある、という傾向を見て取ることができる。語中の例を確認すると次のようになる。

- ・文語-γに対応する音訳漢字。“黒/x-”が1例(1253年聖旨碑)。“合/x-/or/γ-”⁶が2例。“急/k-”が1例(“忽/x-”の誤記か)。
- ・文語-gに対応する音訳漢字。“古/k-”が1例。
- ・文語-dに対応する音訳漢字。“都/t-”が1例。
- ・文語-bに対応する音訳漢字。/-m/韻尾が5例“勘、南、歛、黯、欽”。“不/p-”が1例。

『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』において文語-γに対応する専用字の“黒”が、1253年の聖旨碑に見えるところが興味深い。元代の資料には他に“合”や“急”(“忽”の誤か)がある。これらが後に“黒”に統合されたと見てよいのであろう。文語-g、-d、-bに対応するものとして、無声無気音の“古/k-”、“都/t-”、“不/p-”がある。『華夷譯語(甲種本)』や『元朝秘史』のように文語-g、-dに相当するものに無声有気音の音訳漢字“克/kh-”や“揚/th-”を当てる法は未だ見られない。以上は限られた範囲内での認識であるが、今後の研究の参考にはなるであろう。

興味深い点は、『至元譯語』における文語-bに相当する閉鎖音の音訳法である。これは、『至元譯語』の蒙古語の音韻では-bではなく-mであったというようなことではなく、漢字音の/-m/韻尾を用いて-bを音訳したとみて良いのであろう。もともと、/-m/韻尾と“不/p-”により二重に-bを表記したかのように見える例が1つある。“欽不喫”。このような例は、“欽”の/-m/韻尾が動揺を来たし、音声的には[-m]~[-n]となり、あるいは音韻的にも/-n/とする人々で出てきたため“不/p-”を追加し、蒙古語では閉鎖音の-bなのだ、ということを示したのかもしれない。このような、/-m/韻尾を利用した音訳法および二重表記の音訳法が、『至元譯語』以外の元代の資料において広く見られるものかどうか検討しなければ

⁶ “合”は北方の字音では無声音/x-/となっていたと想定し得るが、本来は全濁音の匣母字であるから、ある種の字音では有声音の/γ-/のような音であった可能性もある。

ばならない。

<参考文献(発行年順)>

- 有坂秀世 1940. 『音韻論』 東京：三省堂。
- 服部四郎 1946. 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』 東京：文求堂。
- 長田夏樹 1953. 「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」, 『神戸外大論叢』 第4巻第2・3号, 91-118頁。『長田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化』 (ナカニシヤ出版。2000年)所収。
- Lessing, F. D. et al. 1960(1995). *Mongolian-English Dictionary*. Original edition:1960. Third re-printing:1995.
- 神田喜一郎 1969. 「八思巴文字の新資料」, 『東洋學文獻叢説』 東京：二玄社。
- 照那斯圖 1977. 「元八思巴字篆書官印輯存」, 『文物資料叢刊 I』 北京：文物出版社, 68-83頁。
- 華光普 1998. 『中国歴代印章目録』 北京：中国民族攝影藝術出版社。
- 照那斯圖 1991. 『八思巴字和蒙古語文獻 II 文獻匯集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 中村 淳・松川 節 1993. 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」, 『内陸アジア言語の研究』 VIII, 1-92頁+図版8。
- 黄 惇 1999. 『中国歴代印風系列 元代印風』 重慶：重慶出版社。
- 呼格吉勒圖・薩如拉 2004. 『八思巴字蒙古語文獻匯編』 呼和浩特市：内蒙古教育出版社。
- 慶谷壽信 2009. 『有坂秀世研究一人と学問一』 古代文字資料館(愛知県立大学 E511 内)。